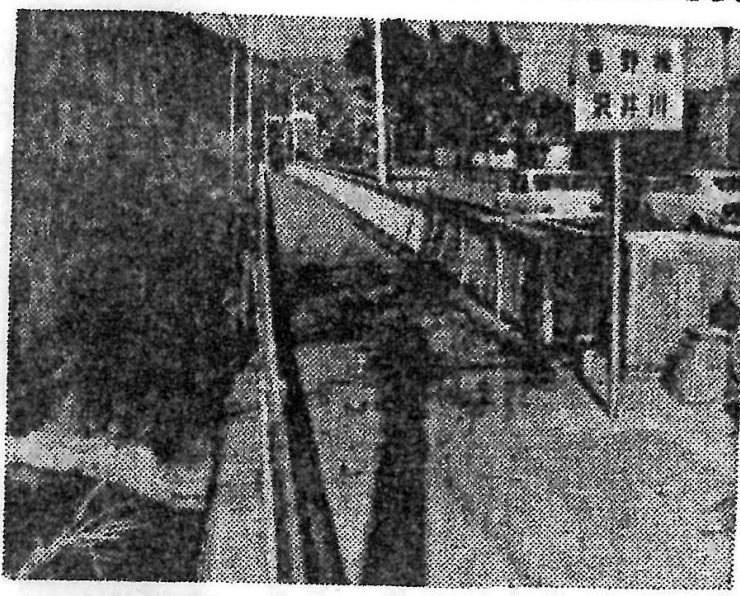


ふるさと再見

第一部 猿橋物語

<15>

今回の架け替えに、さまざま
な影を投じた享永四年(一八五
一)の出来形をもう一度思い
出していただきたい。それは
「甲州道中猿橋宿地内大猿橋
なのだろうか。」



昔の小猿橋はここにあった(甲州街道吉野橋)

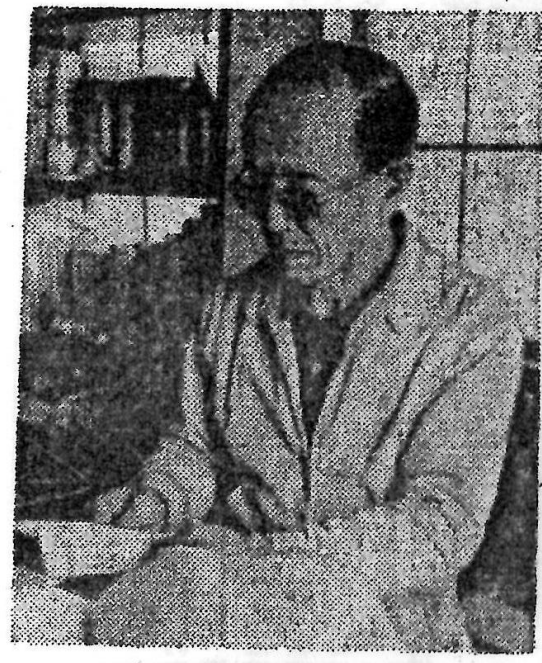
それは確かにあった。同じ甲
州街道の吉野宿(現在の神奈川
県津久井郡藤野町)で、相模川
の支流、沢井川に明治初めのこ
ろまでかかっていたことが、地
元の郷土史家の話から明らかにな
った。

町文化財保護委員の吉野南
(はじめ)さん(六二)。古くから
吉野宿の本陣をつとめた家柄。
数年前、自宅の古い蔵に保管さ
れていた本陣の記録を調べてい
て、小猿橋(こざるはし)につ
づかった。

長さ十四間(約二十五尺)、
幅は不明だが、水面からの高さ
は五丈(約十五尺)。横分小ぶ
りながら、兩岸から木材をはね
出し、甲斐の猿橋と似た奇構を
していたらしい。

余話 小猿橋

今の吉野橋近く 吉野さんが解説



小猿橋の歴史を調べた吉野さん

本陣の記録に残る

おり、古くは元禄十一年(一六
九八)、徳川幕府の普請奉行か
ら四百両の架け替え費用が支給
された。そのあと享永六年(一
七〇九)が四百五十両、元文五
年(一七四〇)三百七十四両、
宝暦六年(一七五六)四百六十
四両、安政二年(一八五五)百
九十両、元治元年(一八六四)
七十両と続いた。
近江から豊後へケヤキ材の出
た甲斐の猿橋と違い、こちらは
建材を購入したらしい。だから
架け替え費用の工面には苦勞し
たようである。馬廻りの、橋脚、
旅籠やそこで働く女性(飯盛り
女といった)から税金をとった
ことが記録されていた。
その後明治十年(一八七五)
百材あたりに別の新猿橋が架け
られ、小猿橋の名は歴史から消
えてしまった。現在の甲州街道
の吉野橋が、かつて小猿橋のあ
った場所といわれるが、もう知
る人は少ない。
甲州街道の大小二つの猿橋。
名前が同じなら、構法も似てい
た? 「同じ時期で、同じような
技術集団が架けたので、しょう
か」。吉野さん(六二)を尋ねた。